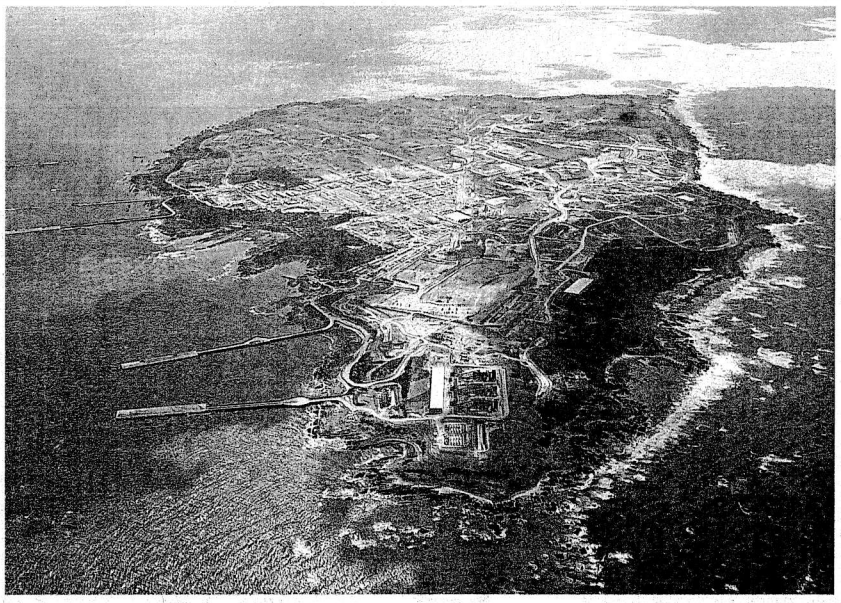
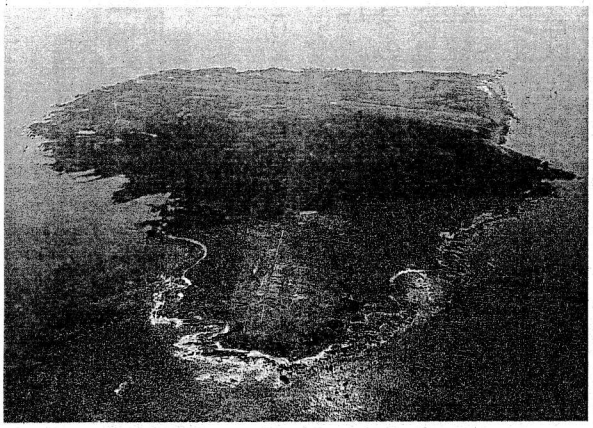
（第3種郵便物認可）　2025.02.23　西日本新聞





右山が崩され、樹林帯はわずかに残るだけとなっていた＝19日（本社ヘリから、撮影・中村太一）

左基地着工前に北端から望んだ島の全景＝2020年10月

安全保障を考える

緑の馬毛島 褐色の要塞化

起伏崩し平たん　減るシカ餌場

自衛隊基地建設 上空ルポ

かつて緑に覆われていた無人島は、むき出しの土で茶色く染まっていた。自衛隊基地建設が進む鹿児島県西之表市の馬毛島。起伏が崩され地形はほぼ平たんに。島を丸ごと基地化する巨大国家プロジェクトには既に約1兆円がつぎ込まれた。自然を「要塞」に改変するすさまじさを本社ヘリから体感した。

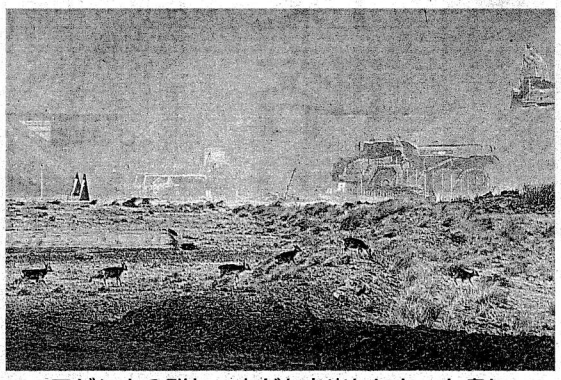
（野村創）

資材を積み降ろす仮設桟橋が海岸から沖に3本伸びる。大型クレーンが林立。トラックやバスが作業用道路をひっきりなしに行き来し、多数の建設機械が絶え間なく土ぼこりを上げている。完成予定は2030年3月末。資材不足などで予定より約3年ずれ込んだ。遅れを取り戻そうとするかのような慌ただしさがうかがえる。

数十棟の白い建物群が目に入った。工事が最も進む中央部。防衛省の施設配置案では「宿泊等支援施設」とある。同省の計画では、24年度末までに約4200室が出来上がる。

造成現場のすぐそばを、環境省のレッドリストで「絶滅の恐れのある地域個体群」に分類されるマゲシカが駆け回っていた。10頭以上の群れを確認。重機と野生動物―。異様な光景があちこちに広がる。樹林帯は海岸沿いなどにわずかに残るだけ。木々の消えゆく島で、シカたちは何を食べて生きているのか。

島の最高地点の岳之腰（71メートル）も削られた。海を隔てた東に種子島の市街地が見える。「岳之腰は海の向こうに毎日望んだ地域のシンボル。富士山のような存在で多くの住民が喪失感を抱いています」。種子島で聞いた70代男性の言葉を思い出した。



マゲシカの群れ。土がむき出しになった島に十分な餌はあるのだろうか＝19日（本社ヘリから、撮影・中村太一）

ワードBOX

馬毛島の自衛隊基地　鹿児島県・種子島の西約12キロの無人島（約8平方キロ）に2本の滑走路や駐機場、格納庫などを整備する。2023年1月に本体着工。昨年12月時点で5010人の工事関係者が種子島と馬毛島に滞在する。陸海空の自衛隊が使用。米軍が硫黄島（東京都）で実施している空母艦載機の陸上離着陸訓練（FCLP）も移転させる。

防衛力強化反対 市民団体が結集

鹿児島市で集会

中国の海洋進出や台湾有事を念頭に政府が進める防衛力強化に反対しようと、西日本11府県の12の市民団体が22日「戦争止めよう！沖縄・西日本ネットワーク」の結成集会を鹿児島市で開いた。「莫大な税金を使って、弾薬庫の建設や基地の大拡張が強行されている。市民の共同の力で、『国家による戦争』を止める」との結成宣言を採択した。

会場には広島や大分、沖縄各県などから約300人が訪れ、オンラインでも約200人が参加した。

「ノーモア沖縄戦えひめの会」運営委員の高井弘之さん(69)は基調提案で「軍事拠点化が西日本から全国に拡大しているが、これまでは各地が孤立した活動を続けてきた」と指摘。「軍拡支持の世論を変えるため、今日からは連帯して闘おう」と訴えた。

今後は情報共有や地域交流を進め、6月ごろには防衛省への要請も検討している。